女性日本画家
たちの
戦中・戦後

木下春　小畠鼎子
谷口富美枝　藤田妙子

実践女子大学香雪記念資料館
Kosetsu Memorial Museum Jissen Women's University

謝　辞

本展覧会の開催にあたり、貴重な作品をご貸与くださいましたご所蔵機関、個人の方々、ならびに研究調査にご協力を賜りました関係各位に厚く御礼を申し上げます。（敬称略）

荏開津通彦　菊屋吉生　角田知扶　船田富士男　学校法人 ゆかり文化幼稚園　松岡山 東慶寺　武蔵野市立吉祥寺美術館　鶴見修復工房

ごあいさつ

実践女子大学香雪記念資料館では、これまで所蔵品を出発点とする企画展を開催してきました。今回の「女性日本画家の戦中・戦後　木下春、小畠鼎子、谷口富美枝、藤田妙子」展では、標題どおり木下春（1892-1973）、小畠鼎子（1898-1964）、谷口富美枝（1910-2001）、藤田妙子（1916-2001）の 4 人を取り上げます。この 4 人の間に直接の関係はほぼ無く、年齢も木下、小畠と谷口、藤田とでは 10 年以上離れています。

木下は前田青邨に師事し、再興日本美術院展に戦後まで出品を続けました。小畠と谷口は川端龍子に師事し、龍子が院展を去って 1929（昭和 4）年に立ち上げた青龍社に参加しました。谷口は 1938 年に脱退しますが、小畠は 35 年間休まず青龍展に出品を続けました。一方藤田は、青龍社を除名された福田豊四郎が吉岡堅二と 1938（昭和 13）年に立ち上げた団体、新美術人協会に出品しました。

昭和期に入る頃から、日本画表現の革新が次々と求められていましたが、 4 人もその渦中でそれぞれの探求を続けていました。中でも院展の木下は保守的な画風と言えますが、《覚山尼》（1942 年）では師の青邨が得意とした歴史画を女性を主役として力強く描いています。戦中、戦後の小品では丁寧な写生に基づきつつ金泥による華やかな効果も加えるなど、確かな技術を発揮しています。小畠は武蔵野市立吉祥寺美術館が代表作を所蔵し、回顧展も開いてきたことで比較的知られた画家です。《突進》（1943 年）では俯瞰した構図で戦時下の緊迫した社会状況をとらえるところに青龍社らしい現代性を見せています。

谷口も龍子に師事し、青龍展にはモダンなファッションの女性たちの溌剌とした姿を発表しました。しかし青龍社を離れ、1940 年頃には歴史画風の女性を描いたり、能に傾倒したりしています。戦時下の制約のなかで谷口なりに芸術を追求しようとした心境をうかがわせます。

新美術人協会は、さらにモダンで抽象的な表現も取り入れた団体で、藤田は第 1 回から出品しました。しかし幼少よりピアノなどの音楽教育を受け、ベルリンで創作舞踊も学んでいたこともあり、戦後は創造性にあふれる幼児教育を追求しました。このように異なる立場の 4 人から、この時代の日本画表現の多様性や新しい試みを読み取ることができるでしょう。

また、展覧会名には「女性」を敢えて付けました。彼女たちは当時としては開明的で自由な環境で教育を受けて画家をめざしたとみられますが、その後の人生では当時の女性が求められた役割から自由ではありませんでした。木下は結婚せずに描き続けましたが、住まいを転々としたことは大作の制作には不自由であったと考えられます。他の 3 人は画家同士で結婚し、小畠の夫の辰之助は洋画家でそれぞれの制作をおこなったとみられますが、日本画家同士で結婚した谷口と藤田の場合は、結果的には画家活動を離れました。小畠を除けば、展覧会出品作の多くが所在不明であり、今回の展示は活動のほんの一部でしかありませんが、ほとんどの作品が都内で初公開になります。今後新たな作品が再発見されることを願っております。

最後になりましたが、貴重な作品をお貸しくださいました所蔵者の皆様、関係者の方々、また調査におきましてご協力、ご教示をいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

2025 年 9 月
児島 薫

展覧会

会　　場　実践女子大学香雪記念資料館　企画展示室 1・2
会　　期　2025 年 9 月 27 日～ 11 月 22 日
主　　催　実践女子大学香雪記念資料館
企　　画　児島 薫

＊本展覧会のための調査の一部には科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金) 基盤研究 (C)25K03678「先進的な女性日本画家たちの 1940-50 年代の活動と研究団体に関する調査」（代表：児島薫）による助成を活用しました。

凡　例

- 本パンフレットは実践女子大学香雪記念資料館企画展「女性日本画家たちの戦中・戦後　木下春、小畠鼎子、谷口富美枝、藤田妙子」（2025 年 9 月 27 日～ 11 月 22 日）に際し、発行するものです。
- 本パンフレットの編集は児島 薫（実践女子大学香雪記念資料館館長）、三國博子（同学芸員）が担当し、矢野綾香（同事務職員 [学芸事務]）、中嶋真里・矢口まゆみ（同臨時職員 [学芸補助]）が補助しました。
- 執筆は木下春・小畠鼎子を三國が、谷口富美枝・藤田妙子を児島が担当しました。
- 記載は作家名、略年譜に続けて、作品番号、作品名、制作年、技法・材質、員数、寸法、初出展、所蔵先等を記しました。

木下 春　きのした はる　1892-1973

1892（明治 25）年
　福島県福島市置賜町に生まれる。
1908 年
　福島県立福島高等女学校卒業。
1912（大正元）年
　杏雲堂平塚病院で療養。のちに俳句の師となる富安風生（1885-1979）と出会う。また、家族の談話によればこの頃に前田青邨（1885-1977）と面識をもったとされる。
1919 年
　絵を学ぶため上京。東神奈川の前田青邨宅に寄寓し師事する。
1920 年
　青邨宅の庭に取材した《秋草》が再興 7 回日本美術院展覧会初入選。
1921 年
　蒼空邦画会に《秋》を出品。再興 8 回日本美術院展覧会に《桃》を出品。院友に推挙される。
1927（昭和 2）年
　この頃、青邨の近所となる横浜市鶴見区に移り住む。
1929 年
　再興 16 回日本美術院展覧会に《秋苑》を出品。
1931 年
　福島県・瀬上町の人物をモデルとした《砧》を再興 18 回日本美術院展覧会に出品。以降、1968 年の再興 53 回日本美術院展覧会まで計 26 回、入選を重ねる。
1936 年
　奈良・当麻寺の客殿の格天井に《粟》を制作、寄進する。
1939 年
　小島一谿、木下春両氏新作画展に《芍薬》《山菖蒲》など花を描いた作品約 20 点を出品。
1940 年
　俳人・富安風生に師事。同年、朝鮮半島を旅行。
1941 年
　再興 28 回日本美術院展覧会に《巴》を出品。この頃、北鎌倉の東慶寺の山内の茶室構えの家に住む。
1942 年
　再興 29 回日本美術院展覧会に《覚山尼》（No.12）を出品。無鑑査に選ばれる。《巴》が美術と趣味社による第三回蒼穹賞を受賞。
1957 年
　前田青邨塾 1 回恵下会日本画展に《小菊》を出品。以降、6 回まで出品。
1968 年
　『木下春句集』（牧羊社、1968 年）を刊行。
1973 年
　福島にて逝去。

木下春は、前田青邨に入門後、わずか 1 年という早さで日本美術院展覧会入選を果たした。その作品の多くが現存不明だが、図版から確認できる初期の画風は、身近な植物を緻密に描いた、丁寧な自然観察に基づくものであった。昭和時代に入ると、《砧》（1931 年、二曲一隻）を皮切りに、《土用ぼし》（1933 年、二曲一双）《機織》（1934 年、二曲一隻、福島県立美術館）など、手仕事や家事にいそしむ女性像を主題とした大作を発表していく。青邨が北鎌倉にアトリエを構えると、これに先駆けるように 1938 年、春も移住。1941 年頃より終戦頃までは北鎌倉・東慶寺山内に住んだ。1942 年、小畠鼎子とともに美術と趣味社による蒼穹賞を受賞する。同賞は審査員に、奥村土牛、山口蓬春、福田平八郎らがいた。

なお、春が東慶寺に住まうようになった経緯については不詳である。ただし、青邨が東慶寺住職の釈宗演（1860-1919）に参禅し、同寺に筆塚や墓所を設けていることから、青邨がきっかけであったと考えられる。春は、東慶寺にいた間、東慶寺を開創した《覚山尼》（No.12）、宮中行事を描いた《もちかゆの日（枕の草紙）》（1943 年）など、女性を扱った歴史画を発表した。また、終戦後は鎌倉市内を転々としながら、同時代の女性を主題とした作品や濃彩な風景画の大作にも取り組んだ。

《覚山尼》（No.12）では覚山尼と女房装束姿の女性を描く。東慶寺は、離婚が許されなかった時代に縁切りの寺法で女性を保護したことで知られる。画面は、離縁をのぞむ女性が覚山尼を頼り駆け込んできた情景を表したものだろう。黄色と朱色を基調とした大胆な構図が目を惹く。当時の評でも「豪快にして華麗、放胆にして秀雅」（豊田豊「院展日本画新人の分野」『美術新報』37、1942 年 9 月）と称された。また、端然とした姿で慈悲救済を、不安定な姿勢で悲嘆を、それぞれ女性のみで表している点に、男性が減少した戦時下の世相をもうかがうことができるだろう。

春はまた、日本画家として活躍する傍ら俳人・富安風生（1885-1979）にも師事。1968 年には『木下春句集』（牧羊社）を刊行した。

【主要参考文献】

吉村有子「福島の美術家たち㉔木下春」『読売新聞』（地方版・福島）1996 年 4 月 14 日朝刊、29 面。
三國博子「木下春の画業と《桃》について」『実践女子大学香雪記念資料館館報』22 号、実践女子大学香雪記念資料館、2024 年、31-41 頁。

No.13
桃
昭和時代
絹本着色、1 幅
122.8 × 29.6cm
実践女子大学香雪記念資料館

No.14
牡丹
昭和時代
紙本着色、1 幅
38.4 × 53.2cm
松岡山 東慶寺

木下 春

No.15
初茸
昭和時代
紙本着色、1 幅
42.2 × 51.1cm
松岡山 東慶寺

No.16
有明桜
昭和時代
絹本着色、1 幅
39.8 × 51.4cm
松岡山 東慶寺

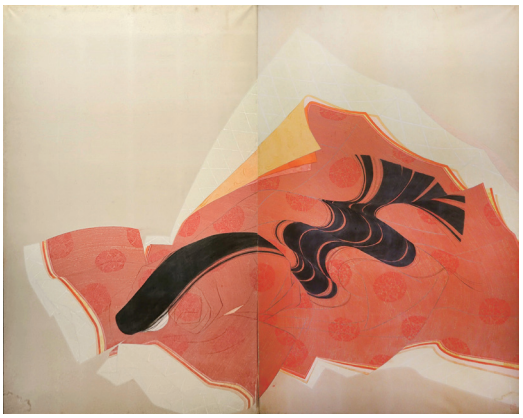
No.17
秋海棠
昭和時代
紙本着色、1 幅
40.2 × 50.2cm
松岡山 東慶寺

No.18
山茶花
昭和時代
紙本銀地着色、1 幅
26.8 × 23.6cm
松岡山 東慶寺

No.19
東慶寺秋景
1942（昭和 17）年
紙本墨画淡彩、1 幅
38.9 × 27.8cm
松岡山 東慶寺

No.20
吉野西行庵
1935（昭和 10）年
紙本墨画淡彩、1 幅
23.3 × 32.7cm
松岡山 東慶寺

No.12
覚山尼
1942（昭和 17）年
紙本着色、屏風二曲一双
各 167.0 × 213.0cm
再興 29 回日本美術院展覧会
松岡山 東慶寺



小畠 鼎子　こばたけ ていこ　1898-1964

1898（明治 31）年
東京・神田美土代町に生まれる。
1915（大正 4）年
東京府立第一高等女学校卒業。池上秀畝（1874-1944）に師事。
1920 年
婦人世界主催・第 1 回女流日本画展覧会に小畠秀葉の号で《青い葉紅い実》を出品。
1921 年
この頃油彩画家の遠藤辰之助と結婚。吉祥寺に住む。
1922 年
父の死に伴い家督を相続。川端龍子（1885-1966）に師事。長女・なな子誕生（翌 1923 年病没）。
1924 年
10 回日本美術院試作展に小畠秀葉の号で《巣籠》を出品。長男・達也誕生（1926 年に陽之助、1931 年に瑛子、1935 年に廣志誕生）。
1929（昭和 4）年
1 回青龍展《山百合》を出品。以降、35 回青龍展まで欠かさず出品する。
1932 年
4 回青龍展《紫陽花》を出品、社子となる。
1934 年
6 回青龍展に《ペリカン》を出品、社友となる。
1941 年
13 回青龍展に《海風》を出品。
1942 年
14 回青龍展に《睡蓮池》を出品。奨励賞を受賞。《海風》が、美術と趣味社による第三回蒼穹賞を受賞。
1943 年
11 回春の青龍展に《突進》（No.2）を出品。
1947 年
19 回青龍展に《山六月》を出品。奨励賞を受賞。
1948 年
20 回青龍展に《白冠図》を出品。社人となる。
1954 年
1 回現代日本美術展に《静物》を出品。以降、4 回まで出品する。
1957 年
安西啓明・小畠鼎子日本画展開催。以降、1963 年まで毎年開催。
1963 年
35 回青龍展に《秋雨海棠》を出品。
1964 年
東京・吉祥寺の自宅にて逝去。

小畠鼎子の画業はおよそ 50 年に渡る。この間、40 年以上を川端龍子の門下生として研鑽をつんだ。龍子の画塾は東京・大森にあり、時間厳守の研究会が月に 6 回ほど設けられていた。鼎子は家事や 4 人の子の育児をしつつ、吉祥寺の住まいから大森へと通い続ける。1929 年、龍子が青龍社を立ち上げると鼎子もこれに参加、同社による青龍展には 1 回から 35 回まで欠かさず出品を続けた。大胆な構図と鮮やかな彩色の大画面の作品を発表し続けた鼎子は、「会場芸術」を唱えた青龍社を支える重要な作家のひとりであった。1957 年以降は、同じく青龍社で塾頭をつとめた安西啓明とともに毎年、二人展も開催した。

《突進》（No.2）は 11 回春の青龍展に出品された作品である。水面を上から見た大胆な構図に、画面左上から右下へと向かうカモの群れを描く。頭部の模様と特徴的な飾り羽を持つ個体からトモエガモを描いたことがわかる。先頭にいる 2 匹は首を前方へと伸ばしており、「突進」の題のとおり勢いよく進んでいる様子を表す。同展では、龍子が天を翔けるペガサスを描いた《征空》、啓明が花咲く木の傍らにたたずむ陸軍兵を描いた《新星》を出品するなど、戦時下という時局を反映する作品が見られた。本作も身近な鳥に取材しつつ、その主題に勇ましさや軍隊を重ねて見て取ることができるだろう。

【主要参考文献】

大内曜編『青龍社の女性画家　小畠鼎子』武蔵野市立吉祥寺美術館、2017 年。
木村拓也「青龍社の人々③　不屈の女性画家・小畠鼎子」『青龍社創立九十年特別展　龍子と同時代の画家たち』大田区立龍子記念館、2019 年、90-92 頁。

No.3　2024 年度新収蔵品
黒盆に梅
昭和時代
絹本着色、1 幅
41.7 × 51.6cm
実践女子大学香雪記念資料館

No.1
千鳥
昭和時代
絹本着色、1 幅
127.4 × 41.6cm
個人蔵

No.2
突進
1943（昭和 18）年
絹本着色、1 面
183.0 × 134.0cm
11 回春の青龍展
武蔵野市立吉祥寺美術館

谷口 富美枝　たにぐち ふみえ 1910-2001

1910（明治 43）年
谷口徳次郎、セイの二女として東京、渋谷に生まれる。
1928（昭和 3）年
女子美術学校日本画科高等師範科に入学。９回女流美術展覧会に《木槿咲く》が入選。
1930 年
２回青龍展に参加。以後４、6、７、８、９回展に出品。
1931 年
女子美術専門学校高等科日本画部卒業。
1933 年
文化学院美術部専修科に１年間学ぶ。１回春の青龍展に出品。以後６回まで参加。木版画、銅版画を制作。
1934 年
６回青龍展に《スキート工場》出品。以後社友。
1935 年
７回青龍展に《粧ふ人々》出品、Y 氏賞。
1936 年
８回青龍展に《海の憩ひ》《山の憩ひ》出品し、Y 氏賞。
1938 年
青龍社を脱退。
1939 年
「第一回谷口富美枝個人展覧会」を銀座紀伊國屋画廊で開催。１回歴程美術協会京都展、２回歴程美術協会展に出品。この頃から仙花と号す。
1940 年
「谷口富美枝第二回個人展覧会」を銀座資生堂画廊で開催。
1941 年
２回美術文化協会展に谷口仙花名で出品。
1942 年
この頃から能に打ち込むようになり、10 月下旬、銀座松坂屋美術部で能画展「谷口仙花個人展覧会」を開く。
1943 年
女流美術家奉公隊結成。役員となる。
1944 年
日本画家船田玉樹と結婚。玉樹の郷里の呉市に疎開。
1945 年
長男富士男を出産。47 年次男洋を出産。
1953 年
船田玉樹と離婚。単身画家活動を埼玉で再開。
1955 年
日系アメリカ人と結婚、渡米するが 57 年離婚。
2001 年
91 歳でロサンゼルスにて逝去。

母が上村松園に絵を習っていたことから美人画に憧れたという谷口は、川端龍子に師事し、モダンなファッションの現代の女性たちが生き生きと活動する姿を青龍展に発表した。しかし青龍社で社友となるも脱退し自立の道を模索した。1939 年、1940 年の個展では現代的な和服の女性を鮮やかに描く一方で歴史的な主題も試みた。《水辺》(No.5) もこの頃の作品とみられ、同じ柄の着物を着た 1941 年の谷口の写真が残されている。顔立ちからも、本作は自身をモデルにして描いた可能性がある。

戦時体制が強まる中、作画の一方で能に傾注し、自作の冊子《花扇》(No.8) には能を学ぶ中で考えたことや能画を描く難しさ、観能記などを記し、「谷口仙花個人展覧会」出品作の能画の写真を貼付している。万葉風の《春野辺》は制作年不詳ながら、同様の図を紀元二千六百年の関連で 1940 年に複数描いていることから、この頃の作とみられる。戦時下ではこうした天皇制に沿う主題が描きやすいものであったのであろう。1944 年には前衛的な日本画に取り組んだ船田玉樹と結婚し、呉に疎開する。戦後二人そろって東京に戻ることを友人知人たちが呼びかけて「玉樹　富美枝　後援画会」を開いたが、玉樹は動かなかった。《春野辺》(No.4) はその関連で棟方志功が所蔵した可能性がある。

【主要参考文献】

北原恵「“モダン”と“伝統”を生きた日本画家・谷口富美枝（1910-2001 年）」『待兼山論叢（日本学篇）』48 号、大阪大学文学研究科、2014 年度、1-25 頁。
角田知扶「第３章　郷土ゆかりの画家谷口仙花」『開館 35 周年記念 呉市立美術館のあゆみ展』呉市立美術館、2018 年、69-119 頁。
北原恵編著『科研報告書 特集：谷口富美枝研究―論文・資料集』2018 年１月。

No.4
春野辺
1940（昭和 15）年頃
絹本着色、１幅
36.3 × 50.6cm
実践女子大学香雪記念資料館

※《春野辺》の図は裏表紙参照

No.5
水辺
昭和時代
絹本着色、１幅
40.3 × 50.4cm
個人蔵

No.6
富貴草
昭和時代
絹本着色、１面
27.2 × 24.1cm
個人蔵

No.7
菊慈童
昭和時代
紙本着色、１面
27.2 × 24.1cm
個人蔵

No.8
花扇（第一巻・第二巻）
1942-1943（昭和 17 ～ 18）年
紙本着色、２冊
24.8 × 17.6cm
個人蔵

No.9
小鼓
昭和時代
紙本着色、１冊
17.7 × 21.5cm
個人蔵

藤田 妙子　ふじた たえこ 1916-2001

1916（大正 5）年
東京・本郷区弥生町（現在の文京区弥生）に、多数の童謡を作曲したことで知られる弘田龍太郎と、劇作家・詩人高安月郊の娘ゆり子の間に、長女として生まれる。両親とも東京音楽学校本科器学部ピアノ科に学び、妙子も早くからピアノを身につける。
1924（大正 13）年頃か
4 年生の時に春陽会の画家に木炭デッサンと油彩画を学ぶ。また児童舞踊家にダンスを習う。
1928（昭和 3）年 3 月 24 日
父が文部省在外研究員としてドイツ、ベルリン大学に留学する際に家族で渡独。ルドルフ・フォン・ラーバンの舞踊学校とマリー・ヴィグマンの舞踊学校で妹たちと一緒にダンスを学ぶ。
1929 年 7 月 8 日
帰国。私立女学校に入学し、1 年ほど内幸町の春陽会洋画研究所で石膏デッサンを学ぶ。
1936 年頃
日本画家の望月春江（1893-1979）に師事。
1937 年
日本画会展に弘田妙子名で《疑寶珠（ぎぼしゅ）》が入選。
1938 年
新美術人協会展に《碧桐》入選。
1939 年
望月春江が創立した日本画院に紫陽花を描いた《てまりばな》出品。日本画家の藤田復生と結婚。2 回新美術人協会展に《白芥子》（No.10）を藤田妙子名で出品。推奨となる。以後も連続出品。
1942 年
5 回新美術人協会展に《ひまわり》（No.11）出品。推奨となる。
1943 年
6 回新美術人協会展に《戦線を想ふ》を出品。
1947 年
夫とともにゆかり文化幼稚園を開園、弘田龍太郎が園長となる。
1949 年
2 回創造美術展に《花ぶさ》を出品。
1950 年
2 回創造美術春季展に《黄水仙》、3 回創造美術展に《キノコ 1》《キノコ 2》を出品。
1951 年
3 回創造美術春季展に《蘭》を出品。
1996（平成 8）年
ゆかり文化幼稚園園長となる。
2001 年
逝去。

藤田の《白芥子》（No.10）以前の作品は残されていないが、師の望月春江の元で身近な花卉、花木を写生に基いて描いていたようである。自伝では「もっと荒々しい新しい絵を描きたい」と「前衛的なグループ」に入りたいと思ったが父に反対されて断念したものの、以後は勝手に描いたと述べている。《白芥子》でも緑青を多用し蝶が群れ飛ぶ点には望月作品と共通点がみられるが、花弁や葉の一部では別の薄い和紙を切り抜いて貼り付け、その上に絵の具を塗っている。画面下の方には大きな葉が勢いよく繁る様子を濃淡の緑で描き、色面によって平面性を強調した画面となっている。

5 回展に出品した《ひまわり》（No.11）では、終わりかけた花、虫食いの葉、枯れかけた大きな葉を単純化して大きく捉え、あたかも生き物がうごめくように描いている。画面向かって左側に焦げ茶色の板壁のようなものを配置したことで、画面に三次元性が生まれ、背景の薄いブルーが空を表すように見える。しかし戦時体制が強化される中、翌年は《戦線を想ふ》という母子像を出品し、夫の出征後は、義父母と 4 人の子どもを養うことに追われた。戦後は父の弘田龍太郎を園長に迎え、夫とゆかり文化幼稚園を設立、音楽やダンスを取り入れた幼児教育に力を注ぎ、子どものためのオペレッタを多数制作した。

【主要参考文献】

藤田妙子『私の幼児教育—子供の可能性を、豊かに伸ばそう—』文化出版局、1971 年。
弘田瑠璃子『私の 12 13 歳の時の外国旅行日記 父弘田龍太郎とすごしたドイツ・ベルリン 1928-1929 年』偕出版、2006 年。
菊屋吉生『日本画 昭和の熱き鼓動』山口県立美術館、1988 年。
濱中真治「創造美術と、その活動」『近代日本画への招待 III—戦後日本画の展開—』山種美術館、1993 年、50-62 頁。

No.10
白芥子
1939（昭和 14）年
紙本着色、屏風二曲一隻
196.1 × 254.6cm
2 回新美術人協会展
個人蔵

No.11
ひまわり
1942（昭和 17）年
紙本着色、屏風二曲一隻
175.1 × 145.6cm
5 回新美術人協会展
個人蔵

谷口富美枝《春野辺》

解説パンフレット

女性日本画家たちの戦中・戦後
木下春、小畠鼎子、谷口富美枝、藤田妙子

発　行　日：2025 年 9 月 27 日
編集・発行：実践女子大学香雪記念資料館
〒 150-8538 東京都渋谷区東 1-1-49
https//www.jissen.ac.jp/kosetsu/